

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

とはずがたり

次田香澄校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

次田香澄（つぎたかすみ）

大正二年東京都生。昭和十一年東京大學國文學科卒業。都立日比谷高等學校教諭・二松學舎大學講師。文學博士。主著―岩波文庫・玉葉和歌集、伏見天皇御製集等。

日本古典全書

「とはずがたり」 次田香澄校註

昭和四十一年十一月二十日初版發行
昭和四十三年三月三十日第二版發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九州

市小倉區砂津・名古屋市中區榮）

定價 六八〇圓

目次

解 説

一 時代思潮……………	三
-------------	---

- (1)時代 (2)リアリズムの思潮

二 久我雅忠女……………	一五
--------------	----

- (1)作者名 (2)久我家・四條家 (3)人物・教養 (4)宮廷における地位

三 作品の形成……………	二六
--------------	----

- (1)執筆の契機 (2)題名 (3)成立年時 (4)傳本

四 他の文學との關係……………	三〇
-----------------	----

- (1)先行日記紀行との關係 (2)先行文學・説話の吸収 (3)流傳、増鏡への影響

五 作品の主題・構想……………	四三
-----------------	----

- (1)主題 (2)構想

六	作品の素材と構成	二
---	----------	---

- (1) 主要事件 (2) 登場人物

七	人間描寫	六
---	------	---

- (1) 雅忠 (2) 後深草院 (3) 雪の曙 (4) 有明の月 (5) 龜山院 (6) 近衛大殿 (7) 隆顯

- (8) 隆親 (9) 東二條院 (10) 遊義門院 (11) 東の御方 (12) 乳母とその家族

八	紀行篇	六
---	-----	---

- (1) 旅の在り方 (2) 紀行篇の意義

九	作品の特質	二三
---	-------	----

- (1) 事實と眞實性 (2) リアリズムとロマンティズム (3) 表現様式 (4) 所載歌の特徵

一〇	作品の意義	三
----	-------	---

一一	梗概	四
----	----	---

一二	本文の制定	四
----	-------	---

- (1) 本文の問題 (2) 本文の誤寫とその處置 (3) 他の諸氏の說によるもの

一三	文獻・論文	三
----	-------	---

凡	例	六
---	---	---

本文.....一八

卷一.....一八

- 一新春の御藥、九獻の式。父雅忠と院との密約。.....一八
- 二 戀人(雪の曙)より文と衣を贈られる。.....一九
- 三 父邸に退出、邸での院を迎へる準備。.....一九
- 四 初夜に院の意に従はず。.....一九
- 五 院の文に返事せず、雪の曙よりの文に返事。.....一九
- 六 第二夜、院の意に従ふ。伴はれて御所に入る。.....一九
- 七 御所での不安な日常。.....一九
- 八 東二條院の御産。.....二〇
- 九 御所の怪異。.....二〇
- 一〇 後嵯峨院發病、嵯峨へ御幸。六波羅の變事。.....二〇
- 一一 後嵯峨院死去、葬送。.....二〇
- 一二 父雅忠出家を新院に願ふ。許されず。.....二〇
- 一三 父雅忠發病。.....二〇
- 一四 院、作者をあはれむ。.....二〇
- 一五 院、父を見舞ふ。.....二〇
- 一六 着帶の儀。父作者に遺言。.....二四
- 一七 父の臨終。.....二六
- 一八 傳仲綱・繼母たち出家。佛事・弔問。.....二八
- 一九 雪の曙來訪、歌を贈答する。.....三〇
- 二〇 雅顯主催の佛事。院より文。.....三三
- 二一 乳母の家で雪の曙と契る。.....三三
- 二二 曙との第二夜。乳母と家族の騒々しさ。.....三五
- 二三 母方の祖母の死。御所に參る。.....三六
- 二四 勝俱胝院に籠る。院の來訪。.....三六
- 二五 曙、雪中に來訪。尼たちに贈物。.....三三
- 二六 院の皇子を出産。.....三五
- 二七 曙と逢ふ。懷妊の兆の夢。.....三六
- 二八 院寫經。作者、曙の子を懷妊。.....三七
- 二九 病と稱して籠り、曙の女兒を出産。その子の處置。.....三九

皇子の死に懊惱。出家行脚を思ふ。……………	三三
院出家の用意。伏見院立坊によつて中止。……………	三四
東二條院の不興を蒙る。……………	三五
前齋宮歸京により院、大宮院と對面。院、作者の事を語る。……………	三六
大宮院・院、齋宮と對面。院心動く。……………	三六

卷二

三六〇

元旦の御所の花やかさと感懷。……………	三六〇
粥杖の報復に、東の御方と共謀して院を打つ。……………	三六一
院、公卿に訴へる。作者の辯明。一族贖ひに定まる。……………	三六二
隆親・隆顯等の贖ひ。隆遍鯉を切る。……………	三六四
實兼の贖ひ。久我尼の反論により院の贖ひ。……………	三六六
御八講の日、有明の月に戀を打明けられる。……………	三六八
龜山院來訪、蹴鞠の遊宴。のち龜山院より文。……………	三六九
六條殿の長講堂供養・御壺合せ。……………	三七〇

作者の手引で院、齋宮と契る。……………	三六九
酒宴。院、今様を誦ふ。……………	三七〇
東二條院、作者を非難。院の辯護。……………	三七二
作者の勧めで院、齋宮と逢ふ。……………	三七三
歳晚、局で曙と逢ふ。……………	三七四
院の病中、有明の月と契る。……………	三七五
六條殿供花。伏見の松茸狩。……………	三七六
院、作者に手引させて「扇の女」と逢ふ。……………	三七七
雨中捨ておかれた傾城、出家する。……………	三七八
有明から文。御所の遊宴に作者ら多忙。……………	三七九
出雲路で有明と逢ふ。感情の疎隔。……………	三八〇
有明からの起請文を返す。新年、御所で有明と出逢ふ。……………	三八一
院・龜山院小弓。負態に女房蹴鞠の催し。……………	三八二
龜山院の負態と院の負態の女樂。作者の琵琶の來歴。……………	三八三

一	祖父隆親の席次の處置に怒つて小林に出奔。……………	二五
二	關係者みな作者を捜す。醍醐に移る。……………	二五三
三	隆顯、父隆親と衝突、籠居。作者隆顯を招く。……………	二五五
三	曙、作者を捜し出し、隆顯と三人語り明かす。……………	二五六
三	小林に戻る。曙との女兒の病をきく。……………	二〇二
三	院來訪、御所に戻る。着帶。……………	三〇三
三	曙との女兒に會ふ。……………	三〇四
三	近衛大殿、院と久我家について語る。……………	三〇五
三	院・大殿、伏見で今様傳授の遊宴。隆顯、白拍子を伴ふ。……………	三〇七
三	筒井御所で大殿に取籠められる。……………	三〇九
三	酒宴、白拍子の歌舞。大殿に呼出される。……………	三〇
三	舟遊。再び大殿に呼出される。京への歸途の感懷。……………	三二

卷 三

三二四

一	院と疎隔の兆。院、有明と作者の對話を立聞く。……………	三四
二	院に有明の事を打明ける。院の述懷。……………	三五
三	院二人の仲をはからふ。その後有明と契る。……………	三八
四	院、懷妊を豫言する。……………	三〇
五	曙來訪の夜火事。支障を嘆く。……………	三三
六	院、懷妊を有明に告げようとする。……………	三三
七	院、有明を許す。有明これを謝す。……………	三五
八	有明に逢ふ。そのうち院、作者にからむ。……………	三七
九	曙の恨み言。着帶。……………	三九
一〇	御花の折、院のとりなしで有明と逢ふ。……………	三〇
二	法輪寺に籠る。嵯峨殿より院の使。……………	三二
三	大宮院・兩院の酒宴。……………	三三
三	兩院に奉仕。翌日の酒宴と龜山院よりの贈物。……………	三五
四	東二條院より大宮院へ恨みの文。……………	三七
五	乳母の家へ行く。有明通ふ。院、作者を訪ねる。……………	三八
六	有明の男子を生む。院のはからひにより處置。……………	三〇

一七	有明の最後の訪問。鴛鴦の夢。……………	三二	三	准后九十賀に大宮院より召される。……………	三九
一八	有明の死。稚兒形見を持参、作者の悲嘆。……………	三四	二	帝・院・宮々参會。御所のしつらひ。……………	三九
一九	院と贈答。院の心隔たる。……………	三六	三	第一日の儀。法會、舞樂。……………	三二
二〇	有明のため佛事。有明の幻を見て病む。懷妊を知る。……………	三七	四	第二日の儀。御膳、御遊。……………	三三
二一	龜山院との仲を疑はれる。……………	三九	五	和歌御會。……………	三六
二二	東山に隠れ男子を出産、自ら育てる。身邊寂寥。……………	四〇	六	第三日、妙音堂の御遊。……………	三七
二三	東二條院の意により御所を退る。院冷淡。祖父隆親と對面。……………	四三	七	院、作者を舟遊に誘ふ。……………	三八
二四	有明三回忌。祇園に籠る。櫻の枝の歌。……………	四六	八	夜の舟遊。連歌。……………	三九
卷四	……………	三七	九	勸賞。作者の懷感。……………	三三
一	都を立つ。逢坂・赤坂・八橋。……………	三三	六	將軍惟康親王が廢せられて都へ上るさまを見る。……………	三二
二	熱田社に参籠して亡父を思ふ。……………	三七	七	新將軍久明東下、準備の相談に招かれる。……………	三五
三	清見關・宇津の山・三島社。江島の夜の感慨。……………	三六	八	鎌倉での和歌の交歡。善光寺詣のため川口へ下る。歲晩の懷感。……………	三八
四	鎌倉の町の展望と鶴岡八幡宮。……………	三七	九	善光寺詣。高岡石見入道邸に滞在。……………	三九
五	小町殿と交通、病臥して往時を思ふ。新八幡放生會。……………	三八	一〇	淺草寺へ詣でる。名月の夜の懷舊。……………	三九

二	隅田川。三芳野の傳承。堀兼の井。……………	三九三
三	鎌倉出立。送別の歌會、飯沼判官との惜別。 小夜の中山・熱田社。……………	三九四
三	歸京後、奈良春日社へ詣でる。春日社の緣起。……………	三九六
四	法華寺、春日正預の家、中宮寺、當麻寺の緣起、太子の墓。……………	三九七
五	石清水八幡で院の御幸に逢ふ。……………	四〇〇
六	院と一夜語り明かす。心を残して京へ歸る。……………	四〇一
七	熱田へ參る。社殿炎上にあふ。記文の傳承。……………	四〇三

卷 五

一	嚴島へ出立。輓、大可島の遊女の庵。……………	四三二
二	嚴島、大法會とその夜景。……………	四三三
三	足摺岬、補陀落渡海説話。……………	四三四
四	白峰、松山に留り寫經供養。崇徳院・土御門院を追懷。……………	四三六
五	備後の和知・江田の豪族邸に滞在。兄弟の爭ひ。廣澤與三入道に再會。……………	四三七
六	荏原まで送られ廣澤入道と贈答。吉備津宮の	

六	伊勢、外宮參拜。神官らと交遊。……………	四〇五
九	内宮參拜。神官らと贈答。……………	四〇七
二〇	二見浦。小朝熊神鏡の傳説。院より傳言の文。……………	四〇九
三	神官らと惜別の贈答。熱田で寫經供養。……………	四二一
三	伏見離宮で一夜院と對面。……………	四二三
三	院、作者の行跡を疑ふ。作者の誓言。……………	四二五
四	院重ねて問ふ。院の述懷、慰問。……………	四二八
五	再び二見へ出立。……………	四三〇

四二

七	印象。……………	四三一
七	歸京。東二條院の病と死去を聞く。……………	四三三
八	後深草院の病を聞き、八幡に願を立てる。西園寺實兼を訪ね、再會。……………	四三三
九	後深草院死去の夜、御所の庭にたたずむ。……………	四三七
二〇	葬送の列を蹴で追ひ、追ひ遅れる。……………	四三八
二	天王寺に參籠。院の四十九日佛事に伏見へ參る。……………	四四〇
三	寫經の資に母の形見を賣る。……………	四四三

三	東山雙林寺で鐵法を營む。大集經を春日社に奉納。……………	四四	一六	龜山院の病を聞く。熊野で夢想到父・院・遊義門院を見る。龜山院死去。……………	四六
一四	亡父三十三回忌。父の夢想。人麿影供を行ふ。…	四五	一七	八幡で遊義門院の御幸に邂逅。……………	四五
一五	父の形見を寫經の資に手放し、經を太子墓へ納める。院の一周忌佛事。……………	四七	一八	院の三周忌、御影供養、佛事。舊知己と贈答。…	四六
			一九	跋文。……………	四六

年	譜……………	四一
---	--------	----

系	圖……………	四四
---	--------	----

地	圖……………	四七
---	--------	----

と
は
ず
が
た
り

次
田
香
澄

解 説

一 時代思潮

(1) 時代

文永八年（一二七一）から嘉元四年（一二三〇）にわたる『とはずがたり』の時代を、その前後と共に歴史的にながめて、以下の考察の豫備的知識としたい。鎌倉幕府の創立から、承久の亂での公家側の敗北を経て、朝廷と幕府との政治的な力の關係は完全に逆轉し、長くつづいた公家政權は失墜して武家政權が確立するに至つた。それによつて、貴族階級の經濟的な基盤であつた莊園は、大幅に武家側の守護・地頭の支配下に入り、ここに古代から中世への社會的變革が大きく推し進められてゆく。

承久の亂後の處理の一として、北條幕府は皇位の廢立を行ひ、以來朝廷に對し大きな發言權をもつて、やがて皇位の順序にも介入する。幕府によつて擁立された後嵯峨院は、皇子の後深草・龜山兩院の即位後も院政を行ひ、合せて二十六年の治世であつた。この時代は朝幕關係が比較的圓滿に過ぎたが、これは北

條氏の勢力が壓倒的であり、朝廷は武家の言ふままに従はざるを得なかつた事情が大きく與つてゐた。この間に關東は皇族から將軍を迎へる政略に出、後嵯峨院の皇子宗尊親王を鎌倉に在住させたが、長じて後廢され、その皇子惟康親王と交替させられる。この宮將軍も前の藤氏將軍の如く、幼時のみの將軍を好都合とする幕府の政策によつて廢立が行はれたのである。

後嵯峨院は、後深草院よりもその同母弟龜山院を愛し、後深草院のあと皇位を嗣がせただけでなく、龜山院の皇子世仁親王（後宇多院）を皇太子としたが、文永九年（一二七二）後嵯峨院は院政の後繼を決めないままで死去した。兩院の母后大宮院は後嵯峨院の長子圓滿院と議つて、故院の遺志が龜山院にあつたことを幕府に示したといはれ、幕府はこれに基づいて龜山院院政を決定した。これに對し後深草院側では、これが後嵯峨院の素志を傳へるものではないとて不滿を表し、これより後深草院（持明院）・龜山院（大覺寺）の兩皇統の對立が始まり、それに關聯して公武の間の紛争を惹起した。

文永十一年（一二七四）後宇多院が即位して龜山院の院政となるや、後深草院は太上天皇の號を辭退して出家しようとう意をし、そのむねを幕府に傳へる。龜山院は事態を憂慮して幕府に收拾策をはかり、當時關東申次であつた西園寺實兼も幕府にはたらしめかけた。その結果、幕府の折衷案によつて後深草院の皇子熙仁親王（伏見院）が後宇多院の東宮となる。その後も實兼は持明院統のため幕府に運動してゐたが、やがて龜山院が幕府に對し異圖があるとの風説に乘じ、持明院統側の活動は活潑化し、幕府に策動して、弘

安十年（一二八七）伏見院の即位、後深草院の院政となつた。武家も持明院統に傾き、正應二年（一二八九）には伏見院の皇子胤仁親王（後伏見院）の立太子をみる。かういふ情勢を悲觀して龜山院は出家してしまつた。同じころ將軍惟康親王は幕府によつて追放され、代つて後深草院皇子の久明親王が鎌倉に下つた。翌正應三年、淺原爲頼が禁中を侵し、失敗して自害する事件があり、これに大覺寺統が關係してゐるとの噂が廣まり、龜山院は告文によつて幕府に異圖がないむねを傳へた。後深草院は事件直前に出家してゐたが、この事件によつて皇統の對立は激化し、幕府は一層持明院統に傾いた。

伏見院は近侍の京極爲兼を寵遇して關東との折衝に當らせたが、爲兼は忠勤のあまり傍輩の嫉視を受け、幕府に讒構されて佐渡に配流されるに至つた。このころ西園寺實兼は大覺寺統に接近し、幕府もその方へ傾斜してきた結果、永仁六年（一二九八）伏見院は後伏見院に讓位せざるを得なくなり、後宇多院の皇子邦治親王（後二條院）の立坊、つづいて正安三年（一三〇一）後二條院の即位、後宇多院の院政と世は一變した。これによつて、次はどちらから皇太子が立つかの問題が起つたが、大覺寺統が後二條院の弟尊治親王（後醍醐院）を、持明院統は後伏見院の弟富仁親王（花園院）を、それぞれに推して激しく幕府に運動した。關東では當惑して、均衡の政策によつて調停に當るべく、兩統から交互に立坊があるのを適當とし、ただし讓位の時期には干渉しないむねを述べた。そこでまづ富仁親王の立太子があつた。

これより先、西園寺實兼は永仁七年（一二九九）出家して、その子公衡が申次を繼いだが、彼は龜山院

に接近し、嘉元三年（一一三〇五）同院が死去すると、その遺言により實兼の二女昭訓門院所生の皇子恆明親王を支持して、これを大覺寺統の皇位繼承者にしようとはたらいだため、後宇多院と對立、ここに大覺寺統内も二統に分派するやうになつた。このやうにして、公家は武家と對立するのみならず、自らの内部も二分からさらに四分への分裂の兆もみられ、皇室の所領をめぐる争ひも深刻となり、内紛による幕府の弱體化もこれに拍車をかけ、對立は紛糾化してつひに南北朝の戦亂へとつづくのである。

鎌倉末期において西園寺實兼は、公家と武家との間に介在して關東申次といふ要職にあつたほか、政治上からも外戚關係の上でも、彼は兩皇統の間で最も都合のよい立場にあるところから、大きな權勢をもつことができた。すなはち後深草・龜山兩院の對抗時代には、實兼は初め持明院統に接觸を保ちつつその權力を伸張しようとして、後深草院に有利なやうにしきりと幕府と交渉した。幕府もまた、實兼と密接に連絡をとりつつ、彼の意向に基づいて政策をとつたから、結局幕府も持明院統に好意的となつたのである。ついで大覺寺統が卷返しを計つて實兼に接近した後は、永仁六年から實兼を中心に政情は大きく轉換していった。

實兼はまづ、正應元年（一二八八）第一女鐙子（永福門院）を伏見院の中宮に納れ、公衡は中宮大夫となるなど、西園寺家と持明院統との間は緊密の度を加へたが、その後大覺寺統の後二條院を即位させた正安三年（一一三〇一）には、實兼の第二女英子（昭訓門院）を龜山院の後宮とし、大覺寺統とも連繫を固く